



有斐閣選書

藥物依存者の 生と死

無頼派作家のバトグラフ

米倉育男 著

米倉育男 著

薬物依存者の生と死

無頼派作家の
パトグラフィ



有斐閣
選書

よねくらいお
米倉育男

1923 (大正12) 年 仙台市に生まれる

1944年 名古屋大学医学専門部卒業

岐阜少年鑑別所所長、

岐阜精神病院副院長などを経て

現在 国立療養所東尾張病院院長

薬物依存者の生と死

〈有斐閣選書〉

昭和57年12月5日 初版第1刷印刷

昭和57年12月15日 初版第1刷発行

定価 1,400 円



著 者 米 倉 育 男

発 行 者 江 草 忠 允

発 行 所 株式 有 斐 閣
会社

東京都千代田区神田神保町 2~17

電話 東京 (264) 1311 (大代表)

郵便番号 [101] 振替口座東京 6-370 番

京都支店 [606] 左京区田中門前町 44

印刷 凸版印刷株式会社・製本 和田製本工業

© 1982, 米倉育男. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

INBS4-641-02304-2

亡き父母に捧ぐ

はし が き

出会いとは不思議なものである。昭和三十一年の夏から三年ほど、私は愛知県のある新設の精神病院長をしていた。そのとき、たまたま数名のアルコール中毒の患者さんが入院して来た。それがきっかけで薬物依存に興味を持つようになったのである。

アルコールや薬物の依存者は、最近ようやく世間の関心をひきつつあるが、臨床医学としてなおマージナルな感を免れない精神医学の中でも、それはさらに辺縁的な、陽のあたらない存在である。それはともかく、彼らが呈する種々の問題行動、すなわち暴行、傷害、器物破壊、怠業、失職、浮浪などは道徳的荒廃や家庭の破壊を伴い、犯罪や自殺を惹起し、ついには精神病院や刑務所への拘束という破局を招くことも多い。

こうした行動のゆえに、世人は彼らをひんしゅくし、排斥し、社会的に葬り去ろうとする。彼らの行動は日常的・常識的世界への非日常的・非常識的介入とみなされる。柳田国男流に言えば、「ケ」(日常)の世界への「ハレ」(祭)の世界の闖入である。この「ケ」の世界はまた「方」の世界ともいえる。「方」とは規矩すなわち秩序であり、道すなわち規範の謂いである。周知のように、「方法」のギリシア語 *methodos* の *hodos* は「道」である。「ハレ」の世界は、こうした「方」を踏み外した、いわば「方外」の世界であり、そこに住む彼らは「方外の人」なのである。

わが国のような単一社会では、とりわけ、人びとの生きざまの多様性への許容度が低く、中世以来、自己に忠実に生きようとすれば、無用者として既存社会の枠組みを越えて「方外の人」となるか、無頼者として反日常的世界を構築し「法外の人」となるしかなかった。いずれにしても、彼らは生活破綻者、不道德者、敗北者と目され、この世に利するところのない者として扱われる。いわば「落ちこぼれ」である。

この、世に利するものがないことを「無頼」という。頼は利の同義語である。史記、高祖本紀の「大人常以臣無頼、不能治産業」がその初出である。久保田芳太郎によれば、「無頼もしくはその徒とは、社会生活とその秩序からはみ出し、はき出された余計の底辺の部分もしくはその負に生きかつ巢食うことおよびその人」である。いうなれば、彼らは社会からの敗残者であり、社会への反逆者であり、社会での余計者、無用者なのである。

こうした無頼性を実生活上にあらわにしたことによって、「無頼派」と呼称されている一群の作家がある。昭和二〇年、はじめて無頼派^{リベルタン}という言葉を用いた太宰治や、敗戦後の数年間に華々しく活躍した坂口安吾、田中英光、織田作之助などを中心に、石川淳、檀一雄、さらに少し遡って葛西善蔵や辻潤らがこれに含まれる。そして、これらの人たちのほとんどがアルコールや眠剤（バルビタール、カルモチン、プロバリン、アドルム）、あるいは覚醒剤（ヒロポン）や麻薬（バビナール）への依存者であったことも特筆される。

ところで、私の「無頼派」作家との出会いもまた偶然なことからであった。私が住んでいる岐阜

市のNという戦前からの小さな古本屋で田中英光全集を買ったのが、そのはじまりとなった。昭和四二年の夏のころである。それ以後、世に利するところのないネガティヴな人たちであるがために、あるいはそれにもかかわらず、ポジティヴな文学作品を遺したこれら薬物依存を伴う無頼派作家を中心とした人びとを、「病跡学」的に眺めてきた。彼らの言動を「法外の人」として一蹴することにはたやすい。しかし、「法外の人」としての彼らの人間であることへの生きざま、実存へのひたむきな志向にひかれ、その「病いと創造」に光をあてながら、薬物依存者の深層を探ってみようとしたのである。

昭和五七年盛夏

著 者

I 薬物依存と薬物依存者

第1章 薬物依存

a 「嗜好」から「嗜癖」へ(1)

b 薬物依存の定義(2)

c 薬物依存への契機(4)

d 薬物依存への過程(5)

e 身体的依存と精神的依存(6)

第2章 薬物依存に親和的な人たち

a 病的衝動(9)

b 薬物気質(10)

c 口唇的性格(11)

II 病跡学と薬物依存者

第1章 病跡学

a 天才と狂気(13)

b 病いと創造(14)

第2章 アルコールへの依存者

1 種田山頭火——16

a 別れてさみしい濁酒があった(16)

b ほろほろ酔うて木の葉ふる(18)

c 朝から

酔うて雨が降る(19)

d 酒がやめられない木の芽草の芽(20)

e もう飲むまいカタ

ミの酒杯を撫でている(22)

2 檀 一雄——24

a わが青春の秘密(24) *b* 暗い時期(25) *c* 青春放浪(26) *d* 火宅の人(28)

e 風浪の旅(31)

3 葛西善蔵——32

a 酒仙(33) *b* 不眠と憂うつ(34) *c* おせい(35) *d* 酒の神様のお蔭(37)

e 白い亡霊(39)

4 辻 潤——42

a コキユの悲哀(43) *b* どりんく・ごうらんど(44) *c* 癡人の独語(46) *d* 天狗

になった(48) *e* 醉生夢死(50)

第3章 薬物への依存者

1 田中英光——52

a オリンボスの果実(52) *b* 禁欲と快楽(53) *c* 眠りの反逆(56) *d* 月光癡狂院

(58) *e* さようなら(59)

2 坂口安吾——60

a 木枯の酒倉から(61) *b* 昂揚と抑うつ(63) *c* 精神病覚え書(64) *d* 負けケレ

マセン勝ツマデハ(68) *e* 遊びせんとや生れけん(70)

3 太宰 治 ————— 72

a 恍惚と不安(72)

b HUMAN LOST(74)

c 客と酒と酒と客(76)

d 無頼派

(78) e 生れて、すみません(79)

4 織田作之助 ————— 80

a 青春の逆説(80)

b 夫婦善哉(83)

c 赤と黒(84)

d 注射人間(86)

e それ

でも私は行く(88)

III 薬物依存の根源

第1章 未生以前のこと

a 子宮内の至福(89)

b 酒壺の中の快楽(90)

第2章 母なるもの

a 最初の他者(92)

b 乳房による安寧(93)

c 悪い乳房(94)

d 「甘え」と母子

関係(95)

e 太母の二面性(96)

IV 薬物依存者とその母

第1章 母親喪失

99

99

92

89

89

1 種田山頭火——99

a 若うして死をいそぎたまえる母(99) *b* うどん供えて母よ(101)

2 檀 一雄——102

a 棄て去った母(102) *b* 聖なる母(103) *c* 原光景(105) *d* 男性樹立(106)

第2章 母親不在……………108

1 葛西善蔵——108

a 勝気で酒好きの母(108) *b* 抑圧された母(109)

2 織田作之助——110

a 勝気で働き続けた母(110) *b* 語られざる母(112)

第3章 母親殺し……………113

1 坂口安吾——113

a あの子(113) *b* 分離不安(115) *c* 母親殺し(115) *d* ふるさとの母(116)

e 成熟の代償(117)

2 太宰 治——118

a 見棄てられ体験(118) *b* 復讐(121) *c* 疎隔体験(123)

第4章 母親っ子……………126

V

薬物依存への途

1 田中英光 ————— 126

2 辻 潤 ————— 129
a 陽性のヒステリー (126) *b* 別荘の坊ちゃん (127)

a 乳母日傘 (129) *b* 相互依存 (130)

第1章 依存と抑制のはざまに 131

1 葛西善蔵 ————— 131

a 依存的傾向 (131) *b* 自己抑制的傾向 (134) *c* 遁走と回帰 (135)

2 田中英光 ————— 136

a 肉体的エネルギー (136) *b* 自己克服 (137) *c* 快楽と禁欲 (139)

第2章 抑うつと昂揚の相の下に 140

1 種田山頭火 ————— 140

2 坂口安吾 ————— 144

第3章 依存対象の喪失 147

1 辻 潤 ————— 147

VI

2 織田作之助——150

第4章 道化の愚行のまにまに——太宰 治……………153

第5章 出立と流離の道すがら——檀 一雄……………157

薬物依存者と女性たち……………159

第1章 配偶者選択……………160

1 伊藤野枝——161

2 宮田一枝——164

3 小島喜代——166

第2章 罪なき被害者と悪役……………169

1 良妻?——171

a 小島喜代(171) *b* 石原美知子(172) *c* 山田ヨソ子(174) *d* 梶三千代(177)

e 輪島昭子(179)

2 罪なき被害者?——181

a 佐藤サキノ(181) *b* 平野つる(184) *c* 笹田和子(186)

3 悪女?——187

VII

薬物依存者の転帰

- a* 浅見ハナ(187) *b* 小山初代(189) *c* 太田静子(193) *d* 山崎富栄(197) *e* 山崎敬子(199) *f* 入江久恵(202)

第1章 自殺

- 1 太宰治の情死 207

- 2 田中英光の自殺 210

第2章 慢性自殺

- 1 結核 214

- a* 織田作之助(214) *b* 葛西善蔵(216)

- 2 脳出血 219

- a* 坂口安吾(219) *b* 種田山頭火(220)

- 3 肺癌—檀一雄 221

- 4 餓死—辻潤 222

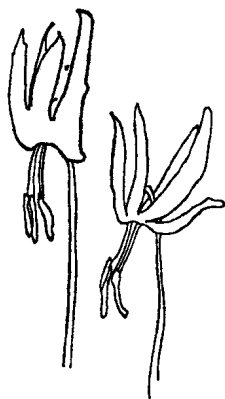
213

206

205

(本文中の原著からの引用は、すべて現代かなづかいに改めた)

I 薬物依存と薬物依存者



第1章 薬物依存

a 「嗜好」から「嗜癖」へ

食後の一杯のコーヒー、一服のタバコ、そして一合の晩酌。それは、無味乾燥な毎日の生活の中でのささやかな慰めであり、また、憩いでもある。こうした「嗜好」性は多くの人びとに共通して存在しており、ある程度は「習慣」化されているといってもよいであろう。しかし、それが一日に五杯も一〇杯もコーヒーを飲み、爪が真黒になるほどタバコを吸い、また、晩酌

が五合にも六合にもなったとするならば、それはすでに習慣の域を越えて、「嗜癖^{しへき}」と呼ばれる状態にのめり込んでいるのである。

嗜癖に相当する Sucht というドイツ語は、わが国の精神医学においては馴染み深い言葉である。Trunksucht (飲酒嗜癖) や Giftsucht (毒物嗜癖) をはじめ、Stehsucht (盜癖)、Kaufsucht (買癖)、Eiersucht (嫉妬) など、「なかば強迫的な習慣」という意味で広く用いられている。「あらゆる方向に向う人間の関心は、嗜癖に変容する可能性がある」と、ゲーブザッテル (v. Gebattel, E.) は言っているが、その意味ではスポーツもギャンブルも性行為も、また、労働すらも広義には嗜癖と呼ぶことができる。

しかしながら、Sucht の語源が siech krank (病んでいる) から来ており、同じ意味の addiction という英語が、「物事への執心のしすぎ、それへの束縛」をあらわす addictio というラテン語に由来していることから、度の過ぎた癖としての嗜癖はやはり病的なのであろう。それが顕著になるのは、タバコやコーヒーのような日常的な嗜好品よりは、本来は医薬品として使用されるべき薬物 (後述するモルヒネやコカインなど) を、甘美な陶醉感に魅せられて常用し、その魔力から逃れられなくなった、いわゆる「薬物嗜癖」の場合であろう。

b 薬物依存の定義

WHO の麻薬専門委員会がきめた「習慣」(habituation, Gewöhnung, accountance) および「嗜癖」(addiction, Sucht, toxicomanie) の定義と、その特徴とは表1に示す通りである。しかし、習慣薬と嗜癖

第1章 薬物依存

表1 習慣、嗜癖の定義と特徴

	習 慣	嗜 癖
定 義	それがもたらす幸福感から、その薬物を継続したいという欲求（ただし強制ではない）。	その薬物の服用を継続したいという、また、いかなる手段によっても、それを得たいという抑えがたい欲求ないし要求。
特 徴	①使用量増加傾向は少ないか、または無い。 ②その薬物の効果へのある程度の精神的依存はあるが、身体的依存はない。したがって禁断症状を欠く。 ③個人および社会に及ぼす悪影響はあるとしても、一次的には個人に限られる。	使用量増加の傾向。 その薬物への精神的（心理的）、通常は身体的依存がある。 悪影響がある。

薬とが実際上は区別し難い場合があることなどから、一九六四年にWHOの嗜癖形成薬物専門委員会は、習慣と嗜癖との双方に共通する要因として「依存」(dependence, Abhängigkeit, dépendance)を重視し、従来の習慣や嗜癖の語に代えて薬物依存(drug dependence)という用語の使用を提唱したのである。

ここでは、「依存」は次のように定義されている。すなわち、その薬物の精神的効果を味わうためとか、その薬物が欠乏した場合の不愉快さを避けるためとかいった理由によって、薬物を連続的あるいは周期的に摂取するという、常に強制を伴った行動的あるいはその他の反応で特徴づけられる、生体と薬物との相互作用の結果としての精神的な、また、ある場合には身体的な状態で、耐性はあるときも無いときもある。

ワン・センテンスで述べられたわかり難い文章であるが、薬物に惹かれる理由が「楽」の享受と「苦」の除去という医療の根源ないし、仏教のいわゆる「慈」